

タイトル	ロミオとジュリエットはなぜ寄宿学校に通うのか？ － マンガ「寄宿学校のジュリエット」を織りなす引用の糸 －
著者	北原，寛子； KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(195)： 19-37
発行日	2024-11-25

ロミオとジュリエットはなぜ寄宿学校に通うのか？

—— マンガ『寄宿学校のジュリエット』を織りなす引用の糸 ——

北 原 寛 子

0. はじめに

日本のマンガ作品はその価値が認められ、学問的考察の対象となって久しい。しかしこの課題をどの分野で、どういった角度から論じるかについては、いまだに限定的であるといえる。マンガを分析する研究の先駆は社会学である。たとえば、とある作品をどのような立場や心情で社会にコミットしている人が読むのか、また読者が社会をどう受け取っているのかを作品を分析して読み解くなどの研究がおこなわれている。あるいは、読者が社会でおかれている立場を類型化して、物語の何にどう共感するか、何を求めているかを分析する考察もある。またマンガを社会の成員同士が共有するコミュニケーションツールとみなし、とある作品を読むことで読者たちは社会の中でどのような役割を演じるようになるのか、あるいは読者同士がその作品を通じてどのような意思疎通を行っているのかを、作品を取り巻くテキストやアンケート調査などから浮かび上がらせるなどの考察がおこなわれてきた¹。

マンガはいわゆるサブカルチャーに含められている。それは高級文化の下位に位置するという意味での従属的文化とみなされるものである。時代と場所を超えて広範な影響力をもつ高級文化に対して、サブカルチャーは消費と娯楽の対象として短命で限定的な作品群とされてきた。しかし高級と通俗という文化に対する二分法は現在も有効ということが出来るのだろうか。長い歴史を回顧すると、バッハやモーツァルトでさえ死後一時的とはいえ忘却されていた時期があった。つまり現在では圧倒的な高級文化に数えられる作品であっても、誕生当初は時代の最先端であっても、否、先鋭的であったからこそ、時間の経過による忘却を被らざるを得なかった。日本のマンガやアニメ、ゲームなどの娯楽的な物語作品は、現在進行形の現象である。経済的な利益を上げことを期待された商品であり、消費活動の対象でもある。そして日本国内にとどまらず、国境を超え、世界の多くの地域で受け入れられている。一方でマンガは文芸的な性格を持ち合わせており、人々の記憶に残る名作は復刻されるなどして再評価されることがある。21世紀の現在に

¹ 上述の先行研究については、次の文献に拠っている。宮台真司・石原英樹・大塚明子『増補 サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の変容と現在』筑摩書房、2007年。

高級文化がどこまでその優位性を保ちうるのかについてあらためて問い直す声も聞かれる。こうした状況のなかで、マンガ作品と高級文化にはどのような接点があるのか、あるいは再評価がどのような形で実現するのか、どのように継承されていくのかなどの問いに、文学作品研究の視点から帰納的な答えを提示することを試みてみたい。

本論は文学研究の立場からマンガ作品の分析に取り組むものである。とある作品が先行する作品からどのような影響を受けて成立しているのかについて、別の作品の枠組みをどのように保ちながら、さらに別の方向からどのように影響をうけ、それらを混交させているのかについての考察をおこないたい。類似のモチーフの背後にどのような「つながり」があるのかについて、マンガということばと図画が組み合わされた形態の作品から読み取ることを目指している。モチーフの継承のなかに、とある作品が他の作品から影響を受けることの必然性について考察する²。

1. シェイクスピア版と平成日本版の『ロミオとジュリエット』

金田陽介による『寄宿学校のジュリエット』³（以下『寄宿学校』）は、『別冊少年マガジン』にて2015年8月号より連載が始まり、途中から『週刊少年マガジン』に移り2019年まで掲載されたマンガ作品である。2018年10月－12月にはアニメーション作品としてテレビでも放映された⁴。発表された雑誌の性格上、想定されている読者層の中心はティーンエイジャーの男性たちであり、彼らの興味と関心に適う描写がなされている。それはたとえば女性登場人物の造形にも如実に反映している。彼女たちは軒並み美貌の持ち主でスタイルも抜群であり、主人公の1人ジュリエット・ペルシアはまじめで優等生という設定にもかかわらず、極端に短い丈の制服スカートを着用しており、大腿部のガーターベルトが露出したエロティックな姿で描かれている。そのほかにも多くの女性登場人物においてふくよかな胸部や引き締まった腰などが繰り返し示され、衣装や動作などで性的な特徴が誇張されている。こうした可憐な女性たちの多くが男性登場人物顔負けの武闘家でもあり、物語の途中には数多く拳闘の場面が描かれている。「ダリア国」にある名門寄宿学校「ダリア学園」を舞台に、エロスと武闘の要素を多分に含みつつ、全体としてはコメディ基調で展開する物語である。

タイトルが示しているように、このマンガ作品は基本的にシェイクスピアの戯曲『ロミオとジュリエット』を土台にしている。ヒロインの名は先述のようにジュリエット・ペルシアであり、彼女の恋人の名は犬塚露王雄^{いぬづからみお}という。主人公たちはまさにロミオとジュリエットの名をそのまま継

² ハロルド・ブルームは、テキストが先行する他のテキストからの影響を受けずして成立することはないことを論じた（Vgl. Harold Bloom: The anxiety of influence. A theory of poetry. London 1975.）。同様の現象はあらゆる媒体に見出しうる。本論ではマンガの特徴である図画の構図からもこの点について分析を試みる。

³ 金田陽介『寄宿学校のジュリエット』全16巻 講談社、2015-2019年。引用に際してはJと略記し、ローマ数字で巻を、算用数字で頁を示す。

⁴ アニメ『寄宿学校のジュリエット』公式HP（<https://juliet-anime.com/>）[Letzter Zugang am 5. Juni 2024] 参照。

承している。そしてこの恋人たちは、本家の2人がモンタギュー家とキャピュレット家の対立のはざままで苦悩したように対立する陣営に所属しており、自分たちの関係を周囲に打ち明けることができない。さらに単行本各巻の表紙および内表紙には“To LOVE, or not to LOVE”（「愛するべきか愛さざるべきか」）とあり、『ハムレット』第三幕第一場での主人公の有名な独白“To be or not to be: that is the question.”（「生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ」）のパロディを認めることができる。モンタギュー家とキャピュレット家の抗争になぞらえ、犬塚露壬雄とジュリエット・ペルシアの帰属は対立する概念で構成されている。彼らの出自は東和国とウェスト公国という当座の和平をかりうじて保っている2つの国とされている。東と西（「ウェスト」）という正反対の方向が、日本語風・外来語風の呼称によってより強く相対化されている。両国の中間に浮かぶダリア島に設けられたダリア学園では両国出身の若者たちがともに学んでいるが、東和国出身者は東和国寮に、ウェスト公国出身者はウェスト公国寮に居住し、生活空間も明確に隔てられている。東和国寮はブラックドギーハウスという異名をもち、ウェスト公国寮はホワイトキャットハウスと呼ばれており、黒と白、犬と猫というように、対をなす概念が幾重にも用いられて両陣営の対立関係が強調されている。「主人から召使まで喧嘩している」⁵モンタギュー家とキャピュレット家がヴェローナの町を舞台に刃傷沙汰を繰り返して起こしていたように、東和国寮とウェスト公国寮の住人たちはダリア学園の体育祭や文化祭などの学校行事から花見や遠足などの余暇活動にいたるまで、さまざまな機会に小競り合いを繰り返している。物語はそうしたエピソードを、さまざまな登場人物の人間関係とともに描写することで進展していく。

このマンガ作品は、シェイクスピア作品から全体の枠組みを借用しつつ、新たな物語を紡いでいる。しかし平成日本の露壬雄とジュリエットがシェイクスピアの単純な再話ではないことは、作品が語りの対象とする時間の長さが異なるだけでなく、有名な場面の相違から容易に察することができる。大きな違いが3つ挙げられる。第一に主人公たちが心を通わせることになる告白の状況について、そして第二にバルコニーでの邂逅、そして第三に恋人たちの末路である。

まずは告白の場面の違いについて確認しておきたい。シェイクスピア版で、ロミオが友人マーキューシオとベンヴォーリオらとともにジュリエットの両親宅で開催された祝宴にもぐりこみ、そこでジュリエットを見初めて恋が芽生える件は、世界文学史上屈指の有名場面である。そしてさらに、部屋に戻って1人きりになったジュリエットがバルコニーで夜の闇に向かって熱い胸の思いを吐露する「ああロミオ、ロミオ、あなたはどのようにしてロミオなの」⁶というセリフも非常によく知られている。ヒロインは、愛してしまった青年が敵対する家の出身者であることを嘆きつつ、周囲の争いはロミオという人間の本质とは関係ないという彼女の思いを率直に吐露する。ジュリエットはロミオに聞かれているとは夢にも思わず、興奮のままに語り続ける。ジュリエットは包

⁵ “The quarrel is between our masters and us their men.” William Shakespeare: *Romeo and Juliet*. In: *The Norton Shakespeare*. Third Edition. Hrsg. von Stephen Greenblatt. London u. New York, 2016, S. 967–1035, S. 986.

⁶ “O Romeo, Romeo, wherefore art thou Romeo?” In: ebd., S. 987.

み隠さぬ本心をロミオに聞かれてしまったので、結果的に愛を告白したことになり、撤回できなくなってしまう。本来ならばジュリエットは恋心を男性に直接伝えるつもりはなく、むしろそれを軽はずみや慎み深さの欠如によるものと否定的に考えている。恋人たちが思いを伝えあったのは、意図や策略とは無縁の偶然のなせる業だったのである。

翻って平成の露壬雄とジュリエット・ペルシアは、両者ともに初等科からダリア学園に通っており、物語の起点となる高等科1年の時点では数年来の知人同士である。露壬雄はジュリエット・ペルシアのことを幼い後輩たちに見せる的確な対応などを垣間見るにつけて高潔な人物と認識し、敵対するグループのリーダー同士であるにもかかわらず、秘かに彼女への恋心を募らせていた。彼女に愛を告白したいと願いつつも、嫌われているかもしれないという不安からどうにもできないでいる状況が続いていた。一方でジュリエット・ペルシアは、喧嘩の最中に犬塚露壬雄が力加減をしていることに勘付いており、彼にか弱い女と思われてバカにされているのではないかと苛立ちを覚えていた。物語の冒頭で、露壬雄と同じ黒犬の寮に属する男子生徒3人がジュリエット・ペルシアを襲う場面がある。そこで露壬雄はジュリエットを救う。ジュリエットは露壬雄の本心が理解できずに戸惑う。そして本気で戦って勝負をつけたいと手紙を送る。露壬雄とジュリエットは、こうしてようやく2人きりになる。露壬雄は彼女に「あなたの本気…見せて頂戴!!」と戦いを挑まれたため承諾する。そして彼女に打ち込みながら、「好きだ、付き合ってくれ」(J・I・46-47)と彼なりの「本気」を大きな声で訴える。ジュリエット・ペルシアは予想外の展開に驚きつつも、「付き合ってあげるから」「世界が変わるところを見せて頂戴」(J・I・52-53)と答えて同意する⁷。可憐な外見に比して意志と腕力の2つの点で強い女であるジュリエット・ペルシアは、犬塚露壬雄に「お前がサバサバしすぎなんだよ!!」(J・I・135)と指摘されるほど現実志向の持ち主であり、闇夜に向かって恋心を独り言でつぶやくような内向的な振舞いをするのではない。もちろんヒロインは卓越した身体能力や武闘家としての強さの一方で、繊細な心の持ち主でもある。しかし彼女は深窓の令嬢ではなく、ウェスト公国での貴族制度における男女同権を求めて学問に励む行動力と、仲間たちに慕われる社交力を備えた外向的な人物である。こうして露壬雄とジュリエットの2人は、ともに友人たちから一目置かれる存在でありながら、恋人同士に

⁷ ジュリエット・ペルシアが言う変革とは、ウェスト公国の貴族制度が男子限定の相続になっていることを女子相続も可能になるように制度変更することである。純愛を貫くことが「世界変革」のためのエネルギーに密接に関連付けられているという点で、21世紀のサブカルチャー作品でしばしば登場する「セカイ系」と呼ばれる作品に含めることができるだろう。サブカルチャー作品における「セカイ系」は、世界を変えるという大義や理想の一方で、それらが具体的に描写されないというジレンマを抱えていることが多いという(前島賢『セカイ系とは何か ポスト・エヴァのオタク史』ソフトバンククリエイティブ, 2010年参照)。『寄宿学校のジュリエット』では、ペルシア伯爵家の令嬢として生まれたジュリエット・ペルシアの個人的な視点による世界の変化が大義として作品の背景に置かれている。既存の社会に圧倒され、そこに服従することを求められているように感じ取っている若年層の読者たちは、制度に絶対的に服従しなくてはならないと信じ込んでいる節があり、逸脱することに不安を抱く一方で、従順であることにも生きにくさを抱えている。そんな若年層の読者たちにとっては、少しでもよい社会を目指して何かを変えたいという登場人物たちの思いや願いは、勇気ある試みとして受け止められているようである。



J・XVI・14-15

なるために周りの目を憚るという矛盾した状況に陥りつつダリア学園で高校生活を送る。

シェイクスピア版と平成日本の露壬雄とジュリエットの2つ目の大きな違いは、ジュリエットの部屋のバルコニーの場面がどこにおかれているかである。シェイクスピアの戯曲では、若い2人が心を通わせる場所は先述のようにジュリエットの部屋に設けられたバルコニーである。これは全5幕中の第2幕第1場であり、前半のクライ

マックスといえることができるだろう。

他方『寄宿学校』では、先述のように愛の告白とジュリエットの部屋のバルコニーは無関係である。では犬塚露壬雄はジュリエット・ペルシアの部屋のバルコニーによじ登らないのかというとそうではない。ダリア学園のホワイトキャットハウスのバルコニーには行かないが、彼女のウェスト公国にある実家の非常に高いところにあるバルコニーによじ登るのである。このエピソードは全16巻の最終巻にようやく現れる（J・XVI・14-15）。物語が佳境に差し掛かったところで、いわば原点回帰のように露壬雄はジュリエット・ペルシアのバルコニーに姿を現す。詳細は後述するが、恋人たちは一時期家族によって引き離される。その時に露壬雄は恋人を助け出すために危険を冒して、高層階にあるジュリエットの部屋に向かって外壁をよじ登り、バルコニーに到達する。本家の『ロミオとジュリエット』では、ロミオは恋しいジュリエットの姿を求めてバルコニーに近寄り、「家の者に見つかったらここはあなたにとって死の場所にもなりましょうに」⁸とジュリエットが心配するほどの危険を冒してロミオがやってくる。家族の反対を感じつつも惹かれあって止まない2人が邂逅する重要な場面は、マンガの中では引き裂かれた恋人たちの再会の場へと形を変えて取り入れられている。

犬塚露壬雄とジュリエット・ペルシアの恋がシェイクスピア版とまったく異なるのは、2人の仲が周囲の人々に受け入れられ、長期間の恋人関係を経たのちに幸福の中で結婚することである。まず彼らの恋は学園内で隠しきることができずに、波乱を巻き起こす。しかし葛藤を経て2国の出身者たちの間のわだかまりは解消され、ダリア学園内では生徒たちの宥和が達成される。その後主人公たちは親族の怒りを鎮めることにも成功した。そうして若い恋人たちはダリア学園を

⁸ "And the place death, considering who thou art, / If any of my kinsmen find thee here." In: Shakespeare, a. a. O., S. 988.

18歳で卒業する。その後すぐに結婚とはならず、それぞれ故郷に戻り、政治活動を7年行っている。そうして両者ともに社会での地歩を固めたうえで、仲間と親族の温かい祝福に包まれながら晴れの日を迎える。結果的には、愛の告白から結婚式までの間に10年近い月日が流れており、冒険や乗り越えなければならない危機も様々にあったことはたしかだが、全体としては緩やかな恋愛だったと形容できる。

一方シェイクスピア版は、よく知られているように日曜日の晩に出会った2人が木曜日の朝には絶命するという非常に短期間の物語で、浮き沈みの激しさはまるでジェットコースターのようなものである。高揚する出会いの次の日には秘密の結婚式が行われ、その日のうちにマーキューシオ、ティーボルトが命を落とす。さらにジュリエットに求婚していたパリス伯まで巻き添えになって死んでしまう。最後に両家の家長たちは、絶命した息子と娘の姿を見てようやく争いの無益さを悟り、和解して許し合う。古典的なロミオとジュリエットは、劇的な死の中にのみ愛の合一が可能であった悲劇的恋愛の典型となっている。だからこそ一層、犬塚露壬雄とジュリエット・ペルシアが学校卒業後7年もの期間を遠距離にありつつ恋愛状態を維持するなど、穏やかで安定した関係とその後の幸せな結婚式は、シェイクスピアとの本質的な違いなのである。

2. なぜ寄宿学校？ — 基本構造における別作品の秘かな影響

シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は、アーサー・ブルックによる物語詩『ロミウスとジュリエットの悲劇的物語』(1562)を下敷きにしているが、フランス語のテキストにさかのぼることができる⁹。さらにイタリア語による物語風ニュースなどにさかのぼることができるとされている⁹。つまりシェイクスピアが1596年に発表した作品は、先行するいろいろなテキストからの引用やエピソードの再解釈の結果として成立しているのである。そして21世紀になり日本でマンガ作品の土台を提供する以前にも、19世紀には例えばグノー作曲による歌劇があり、20世紀にはプロコフィエフ作曲によるバレエ音楽や複数の映画作品などが続き、多様なメディアの活動に刺激を与え続けている。シェイクスピアの枠組みを踏まえながらも、独自の解釈や変更によって第一級の芸術作品に数えられている類話の中には、レナード・バーンスタイン作曲によるミュージカル「ウェストサイド^{ストーリー}物語」(1957, 映画1961)がある。1950年代のニューヨークの下町を舞台に、ヨーロッパ移民によって構成されるジェット団とプエルトリコ系移民がメンバーとなっているシャーク団が敵対しているために、トニーとマリアは愛し合っているにもかかわらず不幸に巻き込まれてしまう。わずか数日の短い時間軸のなかで、物語が疾走感をもって急展開する点でもシェイクスピアが提示した枠が20世紀の都会に巧みに移し替えているのを認めることができる。ジュリエットが「ああロミオ」と恋人の名を呼ぶ独白をする代わりに、ロミオ役に相当す

⁹ Vgl. Stephan Greenblatt: *Romeo and Juliet*. In: *The Norton Shakespeare*. Third Edition. Hrsg. von Stephan Greenblatt. London u. New York, 2016, S. 967–1035. 小田島雄志「ロミオとジュリエット」、小津次郎編『シェイクスピア作品鑑賞事典 — 『シェイクスピア・ハンドブック』改題・増補版』南雲堂、1997年、154–168頁。

るトニーが恋人の名を呼んで「マリア」を歌唱するなど、独自の解釈や変更も随所にみられる。

『ロミオとジュリエット』が演劇からオペラやバレエ、ミュージカルなどの他の様式に移し替えられたとしても、相対立する陣営に属する男女の間に芽生えた激しく短い恋の物語になっている。しかし『寄宿学校』で物語の核となるのは主人公たちの高校時代全般にわたる比較的長い期間である。さらに先述のように、主人公たちは16歳から25歳まで恋人関係にあり、2人が所属する陣営の対立を彼らの愛によって克服する時間と能力を存分に与えられている。これらは、これまでの多くの『ロミオとジュリエット』類話と異なる特徴といえる。なぜ平成時代の日本で語られた『ロミオとジュリエット』類話は、急激な展開と悲劇的な結末という『ロミオとジュリエット』の大きな特徴を与えられていないのだろうか。

あるいは、この問いは次のように別の形に変えることもできるだろう。つまり『寄宿学校』では主人公たちが長期的に安定した恋人関係にあり、生涯添い遂げられるであろうと期待できるところで幕を閉じる点で、シェイクスピアの悲劇と決定的に異なっているのだが、平成日本の露壬雄とジュリエットを単なるシェイクスピアの翻案として、つまり主人公たちの死がもたらすカタルシスをハッピーエンドによる高揚感で代替した作品とだけ見るだけで十分と言えるだろうか——この問いの答えは「否」である。『寄宿学校』において、シェイクスピア版『ロミオとジュリエット』はいわば「隠れ蓑」であり、別作品からの影響を覆い隠している。だがその一方で、当の別作品と『寄宿学校』を繋いでいるのもシェイクスピアなのである。そもそもなぜ犬塚露壬雄とジュリエット・ペルシアは寄宿学校に通っているのだろうか。彼らが故郷から離れてダリア島で寄宿学校に在籍していることになったのは、当該の作品が『寄宿学校』の基本構造に与えた影響によるものと解釈可能なのである。

『ロミオとジュリエット』に付き物であった恋人たちの悲劇的な死が回避された表向きの理由としては、この作品が青少年向けの娯楽として創作されていることが考えられる。先に示したように『寄宿学校』は青少年向け雑誌への連載を元にして成立しているため、読者たちに身近な学校が舞台となることには不思議はない。マンガにはいわゆる「学園もの」と人口に膾炙されたジャンルが存在する。学校を舞台にした物語は若い読者たちの共感を得やすく、読者が自分を登場人物たちと同一化して作品に没入することを容易にしてくれる。さらにあこがれの対象となる場合であっても、状況を想像しやすいという利点がある。読者たちは常に自分の学校生活を実りあるものにすることを願っており、その願いを登場人物たちに投影するので、作品の中でも幸せが実現することを期待している。そのために学校生活の成功とその後の順調な社会生活を描写することは、読者に安心感と充実感をもたらしうる。

しかし『寄宿学校』が「学園もの」であり、なおかつハッピーエンドに至る展開を持つことに對しては、読者の期待に添うだけではない隠された理由が指摘できる。それは『寄宿学校』がシェイクスピアの戯曲以外にも下敷きにしている作品を持っているからである。その隠された作品における愛の不幸な結末を、『寄宿学校』は大団円によって克服しようとしていると読むことができ

る。その下敷きとされた別の作品とは、1975年から1979年にかけて少女向けマンガ雑誌『なかよし』誌上にて発表されて大人気を博した少女向けマンガ『キャンディ・キャンディ』(以下『キャンディ』)¹⁰である。

主人公キャンディス・ホワイト(通称キャンディ)は両親の顔も知らない孤児だが、明るく元気な少女で、真っ白な肌とそばかすだらけの顔が特徴だと繰り返し言及されている。彼女はアメリカのとある平原にある孤児院「ポニーの丘」で暮らしていた。12歳になった時、彼女を引き取りたいという一家が現われた。しかしこのラガン家は、彼女を養女としてではなく、わがままな兄ニールとその妹イライザの遊び相手役の召使として扱った。ヒロインが理不尽な虐待に耐えて暮らしていると、隣家に住む青年アーチャー、ステア、アンソニーの3人がその様子を見かねて一族の長「ウィリアム大おじさま」にそれぞれ手紙で嘆願し、キャンディは養女としてアードレー家に引き取られることになった。幸福の絶頂でヒロインは心優しいアンソニーと恋に落ちるが、それも長くは続かなかった。アンソニーはキャンディの歓迎パーティーで落馬してあっけなく死んでしまったからである。キャンディはショックで心に大きな傷を負い、ポニーの丘に戻る。一方でアーチャーとステアはアメリカから遠く離れたロンドンにある名門寄宿学校聖ポール学院に通い始めていた。そしてキャンディも「ウィリアム大おじさま」の命により同じ寄宿学校で学ぶことになる。そこでキャンディはテリーウス・G・グランチェスターという貴族の青年と出会う。彼は貴族の父がかつて愛したアメリカ人女優を母として生まれた。そして父が母を身分の違いゆえに「捨てた」ことを許さないでいた。テリーウスは父の財産と地位を持て余しつつ、不良少年として過ごしていたが、本当は演劇に憧れ、役者になりたいという夢を持っていた。キャンディとテリーウスは、初めのうちは口論ばかりしていたが、やがて相思相愛となる。ところが、2人の仲を嫉妬したイライザ・ラガンの策略により退学に追い込まれてしまった。学校を去ったテリーウスは、俳優になるべくアメリカに向かう。キャンディも彼を追いかけ、密航するなどの冒険を経てアメリカに帰る。そして看護師になることを目指して学校に通い始める。その後キャンディはスターになったテリーウスと再会できたが、彼のそばには彼を愛する若手女優スザナがいた。彼女は舞台稽古中の事故でテリーウスをかばい、脚を失ってしまう。テリーウスはキャンディを愛しながらもスザナの不運に責任を感じており苦悩する。途中アル中同然で旅回りの劇団に参加するなど自暴自棄な時期を経て、キャンディとの偶然の短い再会によって立ち直り、スザナのもとに戻る。キャンディはアンソニーもテリーウスも失ったが、それでも明るく強く歩み続け、最後に大団円となる。

『寄宿学校』は、この波乱万丈の少女マンガ作品『キャンディ』の枠組みを次の3点で引き継いでいる。つまり、第一に親世代の不幸な恋愛が子世代に影響を与えていること、そして第二に退

¹⁰ いがらしゆみこ(作画)、水木杏子(原作)『キャンディ・キャンディ』第1-9巻 講談社 1975-1979年。引用に際しては現在容易に入手可能な中央公論社から1995年に出版された全6巻の愛蔵版を用いた(Cと略記し、ローマ数字で巻を、算用数で頁を示す)。

学騒ぎが起ること、第三にヒロインが寄宿学校にある2つの寮を行き来することである。

『キャンディ』において、先述のようにテリユースの父グランチェスター公爵は、アメリカの人気女優エレノア・ペーカーと恋に落ち、テリユースを授かった。しかし彼女とは別れ、その後彼女のことを「アメリカの下品な女」(C・II・236)と呼ぶ女性と結婚している。エレノア・ペーカーがすらりとした端麗な容姿で描かれているのに対し、彼の本妻は肥満した体格と醜い顔立ちで描かれている。これはテリユースの父親が好意を抱いていない女性と身分や財産などの世間体のために婚姻関係を結んでいるという背景の事情を読者に雄弁に伝えている。一方、エレノア・ペーカーにとっても息子の存在は女優業に障る都合の悪いものであった。彼女は息子の存在を周りに隠しており、テリユースは彼女に会いにアメリカに行ったときに秘匿するように扱われたことにショックを受け、母を捨てた父親に対してだけでなく、生みの母にも反発を感じて心を荒ませていた。テリユースとキャンディが初めて出会ったのはアメリカからロンドンに渡る船上であったが、テリユースにとっては母に冷たくされた後の旅であり、キャンディーにとってはアンソニーを失った心の傷を抱えた状態であった。その後2人は聖ポール学院の裏庭で再会し、ぶつかり合いながらもお互いへの信頼を育んでいくのであった。

『寄宿学校』では、ジュリエット・ペルシアの父ターキッシュ・ペルシア伯爵がグランチェスター公爵とテリユース父子双方の体験の主要な部分を引き継いでいる。彼が妻として迎え入れ、1人娘のジュリエットを授かった女性はラグドールといい、ダリア学園の1年後輩にあたる。彼女がダリア学園を卒業して数年経った時にかつての先輩であったターキッシュと再会して結婚に至ったとラグドールが自ら語っている(J・XVI・160)。ラグドールの職業は女優であり、その点でテリユースの母エレノア・ペーカーと重なる。またラグドールとエレノア・ペーカーは軽くうねりのある長くて豊かな金髪をなびかせているという容姿の共通点もある。

エレノア・ペーカーは本当は息子をとても愛しているのだが、無理やり引き離されるというつらい出来事を経験していた(C・III・110)。その場面の描写を見ると、幼いテリユースはセーラー服を着ており、帽子もセットで着用している。一方『寄宿学校』では、第15巻の表紙にラグドール・ペルシアが幼い娘を抱き、幸せそうな表情を見せている。この絵の中では小さなジュリエットもセーラー服を帽子と一緒に身に付けている。この幼い日のジュリエットは、テリユースの過去と重ね合わせることができる。つまりこれは『キャンディ』で子どもを奪われるという不幸な目に遭った若い母親が、『寄宿学校』ではわが子を腕にしっかりと抱き、笑顔を取り戻しているという一連の過程で解釈することができるのである。『寄宿学校』第15巻表紙の折り返しに添えられた1文に「お母さんが子供を抱いてる姿尊くて」と作者の述懐が含まれている。この言葉はわが子への深い愛を示すエレノア・ペーカーへの敬意表明として読み替えることができる。彼女が『キャンディ』で体験した悲しみが、作品の枠を超えて『寄宿学校』においてようやく慰めをあたえられ、癒されているのである。

エレノア・ペーカーが『寄宿学校』においてラグドール・ペルシアに生まれ変わっていること



J・VIII・43



C・II・216



J・XV・表紙



C・III・110

は、『キャンディ』におけるテリユースの記憶が、『寄宿学校』におけるジュリエットの記憶へと移し替えられている点からも認めることができる。テリユースはキャンディに、幼少期に両親そろって過ごしたただ一度きりの幸せなピクニックの思い出を語る。「おれが三つか四つのときはっきりおぼえていないが一日だけこんな空の下で おもいきりあそんだことがあった」「おやじやおふくろの笑顔と そのたのしさだけが いまもはっきりと思い出される……」「おやじがいて……おふくろがいて……場所なんかわからないけどむしうにたのしくて!」(C・III・38)と彼は述懐している。名勝などではなく、木々の茂る名もなき一画が思い出の舞台である。木の根元に父親が腰かけ、3人で楽しく過ごしている様子が画面に描写されている。

そしてジュリエット・ペルシアが幼少期のとっておきの体験として犬塚露壬雄に披露するのは、このテリユースから引き継がれた体験と記憶なのである。ウェスト公国に帰ったジュリエットは、露壬雄を連れてバスに乗って街の中心から離れたところに赴き、公園の土手と思しき道なき道を通ってとある場所へと向かう。目的地に着いたとき、「この湖はね 小さい頃にお父様とお



J・XV・120-122



C・III・38

母様がピクニックで連れてきてくれた場所なの」と言ってもこの穴場は私が小さいころ冒険して見つけた場所だけど」(J・XV・121)と語る。父親は木の根元に座って読書し続け、幼い娘に構うことはなかったとはっきり書かれている。とはいえ、これは同じように木の根元に腰かけていたグランチェスター公爵の姿が『寄宿学校』に現れた瞬間でもある。父は読書にふけり、母は虫に不平を漏らしていたにもかかわらず、ジュリエットは「3人で来られて私は楽しかった」(J・XV・122)と言っている。自然に囲まれた名もなき場所で一家3人がそろって楽しく過ごす様子は、彼女自身の思い出であるとともに、彼女がグランチェスター公爵とエレノア・ペーカーの息子テリュースの変身した人物であることを表しているのである。この場所にやってきたジュリエットは「あなたをここに連れて来たかったのよ 私の大好きな場所を露壬雄にも見せたかったから」(J・XV・122)と述べている。これは露壬雄への語りかけであると同時に、作者が読者たちに「大好きな作品を見せたかった」ことを告白していると言葉として受け止めることができる。ジュリエット・ペルシアは伯爵令嬢で、第15－16巻で描写される実家の建物などからは非常に裕福な様子が伝わってくる。その彼女の幼少期の楽しかった思い出が、とある公園で湖を眺めながらのピクニックのみということは本来ありそうにもない。彼女は幼少期から多様な体験をしうる機会に恵まれていたはずで、高い身分に属する人々しか体験できないきらびやかな行事へ参加したこともあったであろうと推測できる。一方高位貴族と外国の女優との世を憚る身分違いの恋では、たった1日といえども温かい陽を浴びながら心穏やかに過ごすことは有難く、貴重な体験だと言える。ジュリエットが高い身分の人間に固有の経験ではなく、公園の片隅での素朴な1日を忘れえぬ日として大切に思っているのは、『キャンディ』においてテリュースが父グランチェスター公爵と母エレノア・ペーカーとともに過ごした短くも幸福な瞬間の記憶を引き継いでいるからである。ジュリエットは、テリュースの体験した辛さや失敗を克服することも運命的な使命として与えられているのである。

『キャンディ』におけるテリュースとキャンディの悲恋は、『寄宿学校』においてまずターキッ

シュ・ホワイトと小戌千和^{こいぬちわ}の悲恋として繰り返される。ターキッシュ・ホワイトとは、ジュリエット・ペルシアの父であり、先に若干触れたようにエレノア・ペーカーの生まれ変わりの存在ラグドール・ペルシアの夫である。『寄宿学校』での彼は、学校を退学してからは『キャンディ』のグランチェスター公爵がエレノア・ペーカーと夫婦になれた状態になっているが¹¹、若かりし頃は学生時代のテリュースとしての立ち回りを引き受けている。

ジュリエットの母は学園に娘を訪ねてきた際、娘に恋人がいることを敏感に感じ取った。母は娘に、相手が黒犬の寮の生徒ならば、その恋をあきらめるように諭す。「私は見たの」「白猫と黒犬の2人が恋に落ちて 学園から追放されるところを」(J・VIII・76-77)と、敵対する白猫・黒犬陣営から生まれたカップルが仲を裂かれたうえに、学園中の反目に遭い、退学に追い込まれたことがあることを教えて警告する。ジュリエットはその出来事が気になり資料を探していたところ、自分たちのことを忘れないでほしいというただし書きの付いた交換日記をみつける。そこに記された恋人たちの名は、ターキッシュ・ホワイトと小戌千和であった。小戌千和はその後結婚して犬塚千和となり、露壬雄を産む。つまりジュリエット・ペルシアの父と犬塚露壬雄の母がかつて恋人同士だったことが明らかになる。ジュリエットは、夏休みに犬塚露壬雄の東和国にある実家を訪問し、彼の母に直接事の真相を尋ねた。そこでジュリエットは、犬塚露壬雄とともに、彼らの親たちの間で起こった学生時代の出来事を知ることになる。

犬塚千和、つまりかつて小戌千和だった女性は、学生時代にダリア学園に馴染むことができず、裏庭で1人昼食を食べるのが習慣だったと語った。その折に木の上にたたずむターキッシュ・ホワイトと出会って恋に落ちたという。大自然の中で育ったキャンディは、聖ポール学院の堅苦しい雰囲気違和感を感じており、つかの間の憩いを求めてしばしば学校内の端にある木々の生い茂る区画に足を運んでいた。その点でも、『寄宿学校』における小戌千和の行動は、キャンディに倣っているのである。またターキッシュ青年が木の上にたたずむ姿は、『キャンディ』においてテリュースが木の上でくつろいでいる姿を彷彿とさせる。ターキッシュ・ホワイトと小戌千和の関係は、全体としてみれば悲愴であるが、格好良いはずのターキッシュが木から降りられないで困っているなど、細部にはコミカルな描写が含まれている。その点でも、テリュースとキャンディが口喧嘩をしたり、ふざけ合いを続けており、全体としてはロマンスでありながら、ロマンティックな瞬間がわずかであることとよく似ている。

恋が学校を去るきっかけになる点でも、ターキッシュ・ホワイトと小戌千和はテリュースとキャ

¹¹ ターキッシュ・ホワイト伯爵は、思い人と引き離され、その後辛い経験を経たためか、結婚生活において陰のある立ち振る舞いをしている。その一例は、先述の湖畔のピクニックでの妻や幼い娘に構わず読書を続けている姿である。そして第15巻では娘を無理やりダリア学園から退学させようとするのだが、ジュリエットに会おうと家に押しかけた露壬雄たちを通したのは、他でもない妻ラグドールである。夫と妻は、娘の教育を巡って異なる対応を見せており、そこからこの夫婦の心理的な距離の遠さが垣間見える。ラグドールは「不幸な母」としてのエレノア・ペーカーは克服しているが、パートナーとの心理的距離という不幸まで最初から解決できていたわけではない。すべてのわだかまりが消し去られるのは、物語の結末においてである。



J・IX・88-89



C・II・256-257

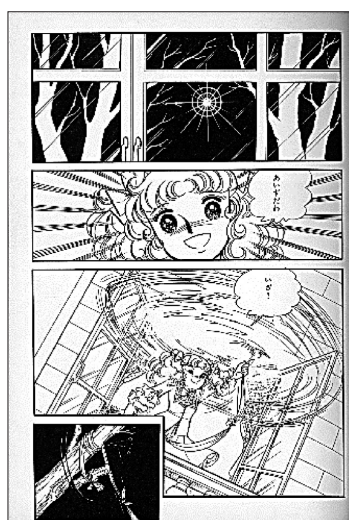
ンディと同様である。キャンディに作品中一貫して意地悪をし続けているイライザ・ラガンは、テリュースとの関係でもキャンディに嫉妬し、ヒロインを追いつめようとたくらむ。彼女は嘘の手紙で2人を夜中に馬小屋に呼び出す。一方で教師たちには、2人が馬小屋で夜ごと密会していると嘘をつく。この悪巧みは見事に成功し、教師たちは学院の名誉を汚したとして、キャンディを退学処分にしようとする。一方で高額寄付者の子弟であるテリュースには自室での謹慎を命じただけであった。テリュースは、父親が身分・地位・財産を守らんがために愛を犠牲にしたことを嫌悪しているため、父親の威信が幅を利かせる学校の対応に嫌気がさし、キャンディの身代わりとなって退学する道を選択する。テリュースが自ら学院を去ったことを知ったキャンディも彼を追ってアメリカに向かい、『キャンディ』における聖ボール学院のエピソードは幕を閉じる。

『寄宿学校』では、最初にテリュースとキャンディの相次ぐ退学という悲劇が、先述のようにターキッシュ・ホワイトと小戌千和によって繰り返される。父親としてのターキッシュの態度に見られる冷たさは、この時の経験によるトラウマが基になっている。その証拠に、第16巻でターキッシュとジュリエットは交際問題を巡って父娘で決闘に及ぶが、父は「ずっと…消えないんだよ」「私が退学後に受けた仕打ちを彼女も受けているんじゃないか…」「私と付き合った事を後悔して生きているんじゃないか…」「その罪悪感が頭から離れない… 東和民とウェスト人が結ばれるなどとくだらない夢を見たせいで!」「なのはどうだ! かつての私と同じ考えを持った男が目の前に現れ」「娘を同じ道に引きずり込もうとしている…気が狂いそうだ!」(J・XVI・56)と苦しい胸の内を吐露する。それを受けて、恋を後悔しておらず、むしろ幸せだったと受け止めているという千和のことばをジュリエットが伝えたことでターキッシュの怒りは鎮まり、問題は解決に向かう。ターキッシュと小戌千和の間には運命の分かれ道のなかで意思疎通の断絶が起こっていたが、それをジュリエットが媒介者として取り持つことで、ターキッシュは過去のわだかまりを解消し、やすらぎを取り戻す。犬塚露壬雄とジュリエット・ペルシアは、親世代の悲恋を情報収集とその伝達によって克服して退学問題を回避することができた。それはまたテリュースと



『寄宿学校』における「ジュリ男」

J・XII・157



女子寮から男子寮に向かうキャンディ

C・II・141

キャンディが周囲の誤解を解いて学校生活を継続させていたらどうなりえたかを楽観的に語っていると読むことができるのである。

ジュリエット・ホワイトは、先述のようにテリュースの記憶を引き継いでいるが、一方でキャンディとしての振舞いも見せている。その例として挙げられるのは、彼女が「ジュリ男」に変装して黒犬の寮を闊歩することである。ジュリエットと少しでも長く時間を過ごしたいと願った犬塚露壬雄は、ジュリエットに東国出身の中等科男子生徒の制服を与え、変装した彼女を「ジュリ男」として仲間たちに紹介していた。つまり「ジュリ男」とは別の寮に侵入するためのジュリエットが実行した手段なのだが、これはキャンディが聖ポール学院の女子寮から男子寮にしばしば移動したことを取り込んだ結果であると解釈可能である。オリジナルが男子寮への移動であったがために、ジュリエットは別の寮では男性の姿にならざるを得なかったのである。キャンディは木々の枝をつたって空中を移動する。ジュリエットが地下のマンホールを移動経路としているのは、キャンディの経路を地中に逆転させたためである。

『寄宿学校』における主役の2人は、シェイクスピアの描いたロミオとジュリエットであるだけでなく、その悲劇のカップルに自分たちを重ね合わせながら恋をしていたテリュースとキャンディの生まれ変わりでもある。犬塚露壬雄とジュリエット・ペルシアは、その名の通り対立する陣営に属しながら恋をするロミオとジュリエットであり、同時に伝説の恋人たちを作中で演じ続けていたテリュースとキャンディーの新しい姿なのである。21世紀のロミオとジュリエットは、古典的な悲恋のみならず、20世紀の「失恋」も克服しようと試みている。

『キャンディ』において主人公キャンディーがテリュースとともに「ロミオとジュリエット」に身をやつしながら恋をしていたことについて、まずは重要な3つのエピソードを通して確認して



『キャンディ』におけるシェイクスピア①
C・II・308-309



『キャンディ』におけるシェイクスピア②
C・III・94-95



『キャンディ』におけるシェイクスピア③
C・V・200-201

おきたい。

1つ目は、聖ポール学院における5月の学園祭「メイ・フェスティバル」におけるキャンディの仮装である。キャンディーは学友らとともに華やかな学園祭を心待ちにしていた。しかしその数日前に、親友パティ・オブライエンが寮で規則に反してカメを飼育していたことが教師たちに露見する。カメを捨てるように指示した教師シスター・グレーに、キャンディーは「なによ がんこばあ!」(C・II・267)と罵ってしまい、反省室と呼ばれる部屋で学園祭が終わるまでの謹慎処分を受けることになった。一方で、キャンディは養父「ウィリアム大おじさま」に学園祭への招待状を送っていた。反省室にいるキャンディーのもとに、「ウィリアム大おじさま」から学園祭には行けない旨を記した手紙と、学園祭で着るための美しい衣装が2着届られる。それが「ロミオとジュリエット」で最初に2人が偶然出会う仮面舞踏会にふさわしい衣装とかつら、それにアイマスクのセットであった。キャンディーは最初ロミオの衣装を身に付け、屋根裏部屋の窓から脱出し、学園祭の舞踏会に紛れ込む。その後さらに木の茂みのなかでジュリエットの衣装に着替えようとする。その際その場にテリユースが現われてキャンディーを驚かせる。さらにテリユースはキャンディに無理やり口づけをしたため、キャンディは非常に腹を立てる。テリユースはこれに答えて、嫌がるキャンディを無理やり馬に乗せて走り回る。そ

うこうするうちに2人は冷静さを取り戻して穏やかに語り合う。「ロミオとジュリエット」で恋人たちは舞踏会で出会ってすぐにやさしく口づけを交わすが、『キャンディ』では、舞踏会の高揚した雰囲気に含まれた祝祭の日の学校内の片隅の出来事に置き換えられている。テリーヌが粗暴であるとキャンディは激昂するが、それでもなお彼はジュリエットに口づけをするロミオとして登場しているのである。

次に「ロミオとジュリエット」について言及されるのは、夏休みのスコットランドにおける湖畔での出来事である。夏に聖ポール学院の生徒たちはスコットランドへの旅行に出かける。そこでキャンディは、自分のスコットランドの別荘に来ていたテリーヌと再会する。彼が持っていた本がシェイクスピアだったのを知ったキャンディは「いっぱい戯曲を書いた人ね 思い出のロミオとジュリエットもそうだわ」(C・III・95)とテリーヌに語りかける。彼女が言う「思い出」とは、先に説明した学園祭での出来事である。この夏休みのエピソードでのキャンディの発言によって、2人の間に学園祭において起こった出来事がシェイクスピア作品の恋人たちと重なることがあらためて確認されているのである。

キャンディがジュリエットにわが身を重ね続けていることは、彼女がアメリカで役者になったテリーヌをキャンディが訪ねて行った時のエピソードでも明白に認めることができる。テリーヌの部屋には、彼が出演する予定の公演のポスターが貼られていた。その演目が「ロミオとジュリエット」であった。キャンディはポスターの表題にペンで書き加え、「ロミオとキャンディのジュリエット」としてしまう。そして「ポスターだけならあたしだってジュリエットができるわ」(C・V・200)と笑顔で語る。こうしてキャンディは積極的にジュリエットにわが身を投影させているのである。

『寄宿学校』で主人公たちが露壬雄とジュリエットでありながらダリア学園で学んでいるのは、『キャンディ』における聖ポール学院のテリーヌとキャンディを踏襲しているからなのである。この少年マンガは、単純にシェイクスピアの作品を基本の軸に据えているためだけではなく、『キャンディ』も同時に語りなおしている。そのために、平成日本のロミオとジュリエットは、キャンディと同様に学校に通うことを運命づけられているのである。そうして400年以上続く悲劇と50年前に語られた悲恋の両方を同時に克服し、愛の中に癒しと慰め、幸福を希求して葛藤しているのである。

『寄宿学校』が『キャンディ』を下敷きにしていることは、設定の細部にも反映されている。例えば寮の名称も『キャンディ』に因むと言える。それはキャンディの名前が「キャンディス・ホワイト・アードレー」であるためである。こうして「ホワイト=白」が登場したために、反対陣営には「ブラック=黒」が割り振られることになる¹²。

¹² 白と黒のペアはキャンディの名前から導き出せるが、猫と犬というペアはどのようにして生まれたのかという問題が残る。その答えとして、白=ホワイトといえば、有名な白猫キティ・ホワイト、いわゆる「ハロー・キティ」「キティちゃん」も関連していると強く推測できる。ハロー・キティは1974年に誕生しており、『キャン

3. おわりに

マンガ作品は高級文化とはどのような接点があるのかについてはじめに問うた。それに対して『寄宿学校』が提示する答えは明白である。それは娯楽作品のなかに世界の名作「ロミオとジュリエット」の枠組みを取り込み、基本の設定としていることである。断片や部分であっても新たに活用されることで、古典は新たなエネルギーを獲得し、さらに多くの人々の心に浸透していくのである。記憶に残り心情に訴えかけることこそが、芸術作品の存在価値であり、生命線だといえる。その点で『寄宿学校』は古典作品の継続的な受容に寄与している。

『寄宿学校』の特筆すべき特徴は、シェイクスピアの再話をしながら、同時に少女マンガ『キャンディ』と記号的に接続し、その物語を変化をつけて語り直していることである。『キャンディ』との関係については、言葉で説明されている箇所はない。しかしマンガは視覚で鑑賞するメディアである。言語化して喧伝しなくとも、図画描写における構図やデザインから多くの情報を読み取ることができる。『寄宿学校』は、重要な箇所『キャンディ』のコマ割りや人物の動作などの描写を引き継ぎつつ、もし別の展開となっていたらどうなっていたのかという可能性を提示している。

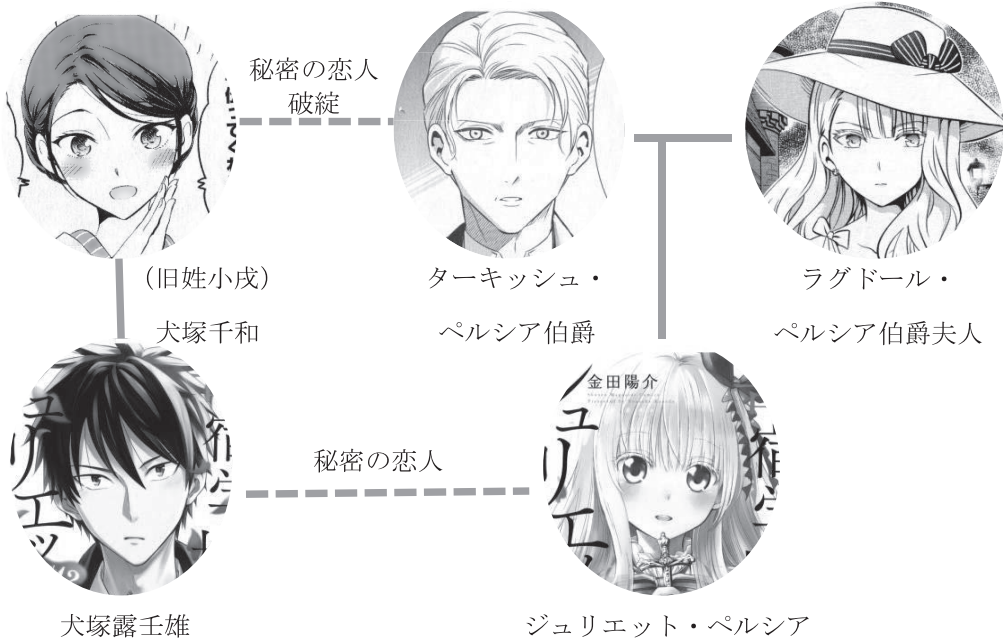
『寄宿学校』は『キャンディ』の語り直しであり、昭和の少女マンガを平成の少年マンガへと編みなおした作品だと言える。『キャンディ』という名作は、このようにして継承され、新たに命を吹き込まれている。つまり『キャンディ』を聖ポール学院のエピソードを中心にして語りなおしたからこそ、『寄宿学校』にはテリュース＝露壬雄とキャンディ＝ジュリエットが登場することになったのである。ゆえに彼らは、ダリア学園と看板を書き換えられた聖ポール学院に通うこととなった。単なる「学園もの」の体裁の背後に、別の作品からの引用とオマージュが隠された仕組みになっているのである。

文学作品で神話や伝説の再話による系譜が存在するように、マンガ作品においても語り直しによって新しい作品が続く。それは新しい創造でありながら、過去の作品を人々の記憶につなぎとめて再生産するという過程をも内包している。少女マンガと少年マンガの垣根を超えて語りなおされた物語は、時代の壁をも超えていく。『寄宿学校』はシェイクスピアの悲劇を21世紀日本の青少年読者に向けて語りなおすなかで、死という結末を先延ばしにし、幸福な結婚をもって物語の幕を下ろしている。それは同時に、『キャンディ』で引き裂かれた恋人たちテリュースとキャンディーがかつての失敗を回避する機会を与えられて、長い一生の道連れ同士になることができた版の物語でもある。

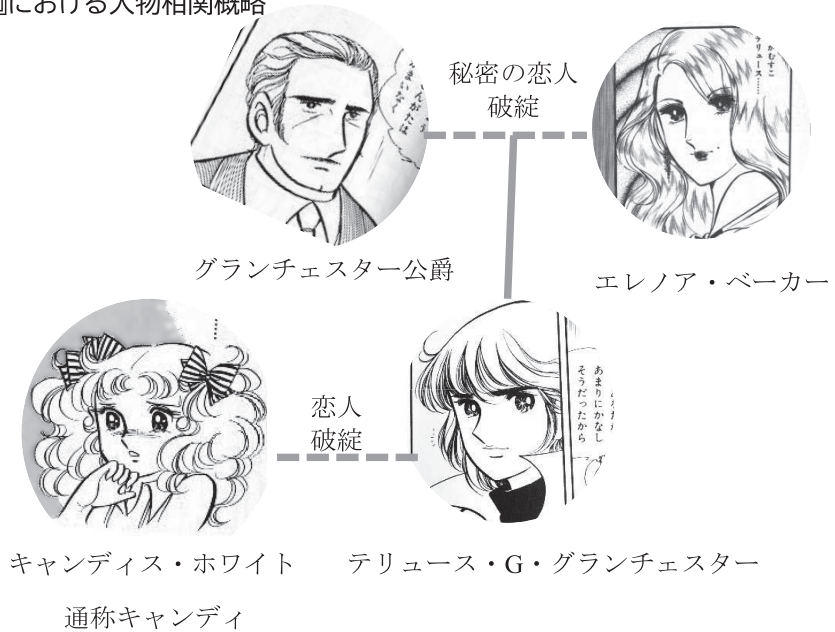
『寄宿学校』のテキスト＝テクスチュアは、シェイクスピアの作品を縦糸に持ちながら、この軸

ディ』と世代を一にしている。またロンドンに住んでいるという設定があり、聖ポール学院の所在地とも関連している。

『寄宿学校』における人物相関概略



『キャンディ』における人物相関概略



を通して物語を織りなす横糸によって『キャンディ』の図柄を浮かび上がらせている。サブカルチャー作品は、確かに消費される対象であり、流行に乗って時代の波に消え、短命に終わる定めを背負わされている側面を備えている。しかし字句通り読まれる受容がある一方で、再解釈やパロディーなどによっても作品は受容される。より多く受容の機会を獲得した作品は、人々の記憶に与えたインパクトによって生命を保ちうる。語り直されることで作品は生き続けるのである。

